

吉川ひろみ 編

作業療法の話しよう

作業の力に気づくための歴史・理論・実践

中村春基（日本作業療法士協会会長）

素晴らしい書籍である。書評の機会を与えていただいたことに心より感謝したい。本書のルーツは、米国の作業療法の100年の歴史を綴った、Andersenによる『The History of Occupational Therapy』とのことである。

第1章は「作業療法のはじまりから今日まで」と題して、作業療法のルーツの道德療法、アーツアンドクラフツ運動、社会背景、米国作業療法協会の誕生、日本における作業療法、世界作業療法士連盟、作業療法の定義の変遷、理論とエビデンス、これからのビジョンと発展について、35の文献を読み解き、著者の目をとおした物語が綴られている。作業療法の歴史の“総説”として、この第1章のみでも十分に価値がある。

第2章は作業療法の理論が生まれる前夜から現在までを、「作業療法のことば」と題して述べている。キャストは「人間作業モデル」「カナダモデル」「アメリカの作業療法」「生活行為向上マネジメント」である。クライアント中心に至った背景、作業のとらえ方、理論などが横断的に比較されていて、それぞれのモデルを俯瞰できる。また、わが国の50年先を走る米国の作業療法の歴史をひもとき、日本の作業療法の立つべき位置を見極めることの重要性を述べている。この章の5節では、「考える、伝えるための道具としてのことば」として、「作業との結び付きと作業従事」「作業的公正」などについて述べている。これらの概念は、わが国の障害者権利条約の合理的配慮や地域共生社会や地域包括ケア、まちづくりなどにおける作業療法の取り組みを支える概念である。

第3章は「作業療法をする人」と題して、作業療法の専門性と知識、技能について、人-環境-作業の関係と、その健康・幸福・人権との関係、またクライアント中心の観点から述べている。

第2章と第3章は、次の第4章の「作業療法の物語」と第5章の「悩める作業療法士が開く扉」の基調を成している。読者の中には、作業療法の学生であったり、米国やカナダの作業療法の知識に接したことのない方も多いと思う。そのような方でも、第4章で紹介されている25の事例と第5章を読んでもらうと、「なるほど、作業療法とはこういうものか」と納得できると思う。

その第4章の「作業療法の物語」では、25のさまざまな取り組み事例が紹介されている。その中の一つの物語「資格の壁」では、29歳のハナさんの思いを実現するために、ハナさんの成長に寄り添い、「訪問介護員養成研修事業」を立ち上げ支えた事例が紹介されている。ハナさんの課題を地域課題としてとらえ、地域の資源を開発し支えるという、統合、人権モデルでの作業療法の実践である。また、第5章の3節「作業療法実践を阻む壁」では、「作業療法の認識」「実践環境」の視点から、わが国における作業療法の「しにくさ」についてやさしく解説している。多くの読者に「悩みはわたしだけでない」と勇気を与えてくれると思う。

最後の章は、寺山久美子、宮前珠子、澤俊二、吉川ひろみ各氏による座談会が収録されている。日本の作業療法の黎明期から現在までをひもとく視座を与えてくれるとともに作業療法士一人ひとりが行う実践の大切さを教えてくれる。

冒頭でも述べたが、本書に出会えたことに心から感謝している。作業療法人生における学びの楽しさを教えてくれ、「作業療法の話しよう」と本当に思わせてくれる良書である。本書とともに、「みんなで一緒に壁を乗り越えていきましょう」。

(B5 頁256 2019年 定価：本体3,600円＋税
[ISBN978-4-260-03832-4] 医学書院刊)